
天使の遊ぶ世界

亜稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の遊ぶ世界

【Nコード】

N3988X

【作者名】

亜稀

【あらすじ】

異世界を舞台に世界最強の人間(?)とその相棒である彼女が旅をするお話です。西へ東へ、自由気ままに世界を旅をし、騒動を巻き起こし、巻き込まれます。

性格以外はパーフェクトな彼。

何が何でも常識を手放せない彼女。

そんな2人の物語。(一応、主役は彼女です。そして、題名に天使が書いてありますが、実際には天使は出てきません)

プロローグ（前書き）

い
誤字脱字、ご意見、等ございましたら、遠慮なくご連絡ください

プロローグ

人間 対 竜。

通常であるなら、その勝負の行方は明らかだ。

魔獣の代表格であるような竜に普通の人間が勝てる訳がない。

しかしながら、その人間が普通の人間ではなかった場合、勝敗が変わる事もある。

戦う事に長けた人間 戦士や魔法使いであった場合、その腕前によつては勝つことも不可能ではない。

もっともそれは竜の種類によつても言えることではあるが。

一口に竜と言っても、ピンからキリまである。

中級に属するものなら個人での勝利は可能である。

過去にも、それなりの実例がある。

しかし、それが上級に属するものであるならば、個人での勝利は絶望的になる。

数人のパーティーを組み、少なくとも犠牲を出しながら、その果てに倒すことが可能になる。

こちらもパーティーであるなら、いくつかの実例がある。

どちらにしても、竜とは容易に倒せる相手ではなく、その打倒者は竜殺しと呼ばれ称えられる存在である。

どこぞのナレーションが彼女の頭を流れていく。

それは少なくともこの世界の常識であるし、真実と言ってもいい内容だ。

世間一般的には。

そう、それは世間一般的な話であって、彼女の認識には合わない。より正確に言うなら、何事にも例外はつきものだと言う事だ。と言うか、現在進行形で世界の常識は破壊されつつある。

人間 対 竜。^{ドラゴン}

人間が無傷。^{ドラゴン}
竜が瀕死。

ちなみに、人間は男性1人だけ。^{ドラゴン}
竜は上級の下ぐらい。

世間の常識からいえば、間違った光景ではあつたが彼女に驚きはない。

ただ、不条理感があるだけで。

ある意味、それさえも今更ではあるが。

彼女としても伊達で彼の相棒をしている訳ではない。

人間は慣れる生き物なのだ。

それどころか、それなりの年月一緒にいる事もあり、うっかりすると彼女の常識の方が書き換わりかねない。

いやいや、それはマズイ。

自分が常識を手放したら、誰が彼を止めてくれるのか？

それ故に、彼女は何が何でも常識を手放せない。

多分、彼女が常識を手放したら、終わる。

何とは言えないが、何かが終わる。

それから数分後。

勝負はついた。

結果？

言うまでもなく、彼の完全勝利である。

さらに付け加えるなら、かすり傷程度しか負っていない。

何かが間違っている。

彼女の名はローザ・イルルシュターニ。

彼の名はミカエル・ローシェリア。

これは限りなく最強に近いミカエルとその相棒ローザの物語である。

プロローグ（後書き）

連載始めてしまいました。

行き当たりばったりの連載ですが、どうぞお楽しみください。

第1話 依頼達成です

時刻は夕方。

まだ日が暮れはしないが、通りは賑やかに人が行き来する。

家路に急ぐ者もあれば、酒場に向かう者もいる。

ご飯時と言う事もあって、通りの両脇の露店では様々軽食も売られている。

何らかの肉をシンプルに炙ったもの。味付けは塩・胡椒か甘辛いソースか。

薄いパンの間に野菜を炒めた物や肉を挟んだもの。

魚の切り身を油でカラッと揚げたもの。

肉と野菜を串にさして焼いたもの。

甘い焼き菓子の類も多く売られている。

そんな人混みの中、彼女たちの前には綺麗に道が出来ていた。

いや、正確に言うなら、彼の前には。

それはもう、魔獣か魔族にでも出会ったかのように、人が硬直し、飛び退く。

便利ではある。

無言でいつも通り面白くなさそうな顔で歩いている彼の内心は知らないが、彼女としては楽でいいと思ってしまう。

と言うか、思わないとやっていられない。

向けられる視線にも思うところがないわけではないが、慣れた。

誰が何と言おうと、慣れた。

いちいち気にしては生きていけない。

彼 ミカエルの相棒になってから、彼女 ローザの神経は確実に凶太くなっただろう。

「鬱陶しい」

ドアを開けた瞬間から、2人に視線が突き刺さる。はつきりと不機嫌なミカエルのセリフはローザの内心と被った。が、ローザにはそれを口に出さないだけの常識があった。ミカエルが口に出しているので無駄と言えば無駄な常識ではあるが。

「なら、さっさと用件を済ませて宿に行きましょう」

と言うか、そうしたい。

無言で肯定を示すミカエルとともにギルドのカウンターへ向かう。

ここ冒険者ギルドでは様々な仕事を持ち込まれ、請け負われていく。

仕事は難易度によってランク分けされており、請け負う人間も当然のことながらランク分けされている。

まあ、細かい事は各ギルドの責任者に一任されているので、そのランク分けが絶対という訳でもないが。

ランクは上からSS・S・A・Bと続き、一番下はHとなっている。

Hはギルドに登録したての初心者で、SSは世界に名声が轟くような腕前の持ち主。

そして、このミカエルは世界に3人しかいないSSランクに属し

ていたりする。

彼の相棒であるローザはAランク。

もっともミカエルとパーティーを組み、生きていただけでランクが上がったので、ローザ自身にその辺の自覚は皆無だったりする。周りのローザに対する認識も、概ねそんなものだ。

「いらっしやいませ。本日はどのようなご用件でしょう」

にっこりと愛想よく決まり文句を口にする受付嬢。

ちよっぴり頬が引きつっているだけ、と言うのは十分賞賛に値する。

過去には急に泣き出したお嬢さんもいた。

どうも話を聞くに、鋭い雰囲気と目が非常に恐怖をあおり、全身から近寄るなと言うオーラが出ているらしい。

……………同意しないでもない。

しかしながらちよっと考えてほしい。

ミカエルが不機嫌そうな顔をしているよりも、笑っている方が怖いと思うのだが？

絶対に、善からぬ事をたくらんでいるに違いない。偏見だと言われようと、そう断言できる。

「依頼達成の報告にきました」

「ミカエル様とローザ様ですね。依頼を確認しますので、少々お待ちください」

対応に出たのがローザだったので、受付嬢は安心したようだ。

そこまであからさまではない受付嬢の対応に、ミカエルも眉間のしわだけで済んでいる。

「……………はっ？ えーっと、竜退治？…ですか？」

「そうです」

「お二人で？」

「ええ」

「依頼達成？」

「これが竜の逆鱗です。確認してください」

半ば呆然としながらも、確認作業を続けられたのは素晴らしい。

そんなプロ根性にあふれる受付嬢でも、受け入れられる事と受け入れられない事があるようだ。

と言うか、普通はある。

吃驚して、魂が半分くらい出てしまっているらしい。

ローザが竜の逆鱗を受付嬢の手に乗せる。

逆鱗と言うのは当然ながら生きてきた竜から取れる物ではない。魔力の源になっていいるため、触れるだけでも怒り狂う。その逆鱗を持っていると言う事は、竜退治に成功したという何よりの証。

と言うか、サイズがサイズなので死体を持つてくることは普通無理だ。

まあ、普通は。

ローザの場合は空間魔法が使えるので、そこに死体をそのまま放り込んであるのだが。

文句があるなら　　ないと思うが、死体を取り出して見せてもいい。

「もしもくし？」

「驚かすか？」

「つて、待つて、ストップ。」

「何で剣に手をかけてるの？」

先ほどの眩きと、手のかけられた剣。

予想は難しくくない。

「取り敢えず、その辺の物でも斬ったら気が付くだろう」

「気が付きません」

きっぱりと言っておく。

それ、絶対にさらに意識が飛ぶから。

それ以前に、問題なく片付くとも思えない。

「では、その辺のを2・3人斬るか？」

「却下」

悪化している。

間違はなく悪化している。

そんな簡単に人死にを出さなくてもらいたい。

そんな難しい話ではないはずなのに、なぜミカエルにかかると難易度が跳ね上がるのか？

ローザにはつくづく謎だった。

第1話 依頼達成です（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
誤字脱字がありましたら、ご連絡ください

第2話 ケンカを買いましょう

「2人だけで竜退治なんて嘘くせえー」

「どうせ何か裏があるんじゃないかねえの？」

そう言っつて嗤うゴロツキ、よりは若干真面な格好の2人組。

ランクは高くてもE。

中身は下種。

そして、命のいらぬ大馬鹿者。

ローザは心中できつぱりと断じる。

ついでに、一応、冥福も祈っておく。

なぜ自ら死地に飛び込むのか？

よくある事ながら、ローザには本気で謎だった。

そんな解答の出ない事を考える前に、今後のあれこれを考えるべきかもしれないが。

ざつとギルド内を見まわして確認。

ギルド員が5名、冒険者が4名、依頼人の姿はなし。

保護対象はギルド員だけで大丈夫なようだ。

他の冒険者は仮にも冒険者をしているのだから、判断を誤らずに逃げる事くらいできるだろう。

そう信じる事しておく。

「シールド全能の盾」

ローザが魔法を発動すると同時に空気を斬る音がする。
ぎりぎりセーフ。

生じたであろう砂埃も衝撃も、全て魔術で作られた不可視の盾が防いでくれる。

魔術の素早い発動は、日頃の成果としか言いようがない。
きちんとギルド員も盾の領域内に庇えた。

「ミカエルがご迷惑をおかけいたします」

にっこり笑顔で謝罪する。

と言うか、笑うしかない。

色々と思うところはあるが、全て無駄でしかない。

状況についていけないのか、5人は無反応だ。

よくなった視界やあんまり耳にすくなくない悲鳴が聞こえてきた段階で、ようやくこのギルドの責任者が反応を示した。

「こちらこそ、助けていただいたようで」

「いえいえ、当然の事です」

むしろ感謝される方が、良心が痛む。

現在進行形で建物は壊れていつているのだし。

犯人は相棒なのだし。

こちらが謝るべきだ、どう考えても。

「あの……」

「はい？」

「これ、魔術ですよね？」

意外に早い復活を遂げた受付嬢が、見えない盾を指さす。

「ええ、魔術です」

「シールド全能の盾ですよね？」

「そうです」

「……………大丈夫ですか？」

恐る恐る、といった様子で聞かれる。

数回瞬きし、しばし考える。

質問の意図がよく分からない。

そんなローザの様子にギルドの責任者が助け舟を出してくれる。

「この魔術はかなり魔力を消費するはずですが、流石はランクAですな」

「そうです。普通なら発動時間は数秒、って聞きます」

ようやく分かった。

ローザが使っている魔術、シールド全能の盾。

あっさり使っている割には高度な魔術であり、恐ろしく魔力を消費する。

しかしそれに見合う効果があり、ほぼ全ての害悪から身を守ってくれる。効果領域は基本的に術者の周り。より魔力を消費するが、効果領域を広げる事も可能である。

デメリットはやはり消費される魔力が大きい事。よって、いかにタイミングよく、攻撃を受ける瞬間のみに魔術を発動するかがキーになってくる。

その魔術を結構な領域で、現在も使用中。

並みの魔法使いならとつくに魔力が切れていてもおかしくない。

「これくらいできないと死んでますから」

「.....」

謙遜でも誇張でもない。

事実である。

今の状況からしても分かる通り、ミカエルは周りの事を考えてくれない。

攻撃範囲にローザが入っていても、普通に攻撃する。

巻き添えとかも考えない。

ミカエルの相棒に必要なものは、何をおいても自分の身を守れる事である。

攻撃力はミカエルが過剰なほどに持っているので、なくても大丈夫。夫。

と言うか、相棒いらないんじゃないの？

「一日くらいなら魔術維持できますから、安心してくださいね」

「.....はい」

この状況、ローザとミカエルしか笑えない。

この冒険者ギルド、フォルスト神聖王国、王都支部の責任者
クライブ・カーンはローザの評価を改める。

ランクSSの魔王・ミカエルの相棒は、それだけの実力が十分に
ある。

そうして、ミカエルの評価も改める。

噂は噂ではなく、まだまだ甘いと。

全員見ないし、耳に入れないようにしているものに、そう改めざ
るを得ない。

異名の魔王は伊達ではないのだ。

「ああ、それと壊れた建物は時間魔術で直しますから」

どこかズレた、現実的かつ建設的な言葉。

悲鳴が聞こえなくなり、魔術を解除するまで、ローザは笑顔で押
し通した。

引きつっていようと何だろうと、笑顔じゃなくなったら終わりな
気がしたのだ。

何しろ、よくある事なのだから。

今回は当事者にしか被害がないので、マシな方だ。

ある意味ケンカなので警備兵に拘束されることもないだろう……
多分。

相手が死亡していても自己責任の範囲内……のはずだ。

それ以前にミカエルを牢に放り込める存在がいるとも思えない。

そんな事を考えながら、彼女は異名の大天使に相応しい笑顔を浮
かべ続けた。

ランクSSの魔王・ミカエル。
ランクAの大天使・ローザ。

2人のフォルスト神聖王国での冒険は、ある意味、非常にらしく滑り出したのだった。

第3話 現在地の確認

国はフォルスト神聖王国。

その王都ネルイ。

その中心部からやや離れた所に、それはあった。

冒険者ギルド直営の宿。

冒険者ギルド直営の宿、と言うのは、そう珍しい物ではない。

ちよつと大きな都市になら、必ずと言っていいほど存在している。値段は少しばかり割高ではあるが、防犯や情報収集と言った面から考えれば、決して割に合わないものではない。

むしろ、重要な仕事の最中などにはなくてはならないものだ。なにしろ宿の従業員全員が何らかの武術や魔術に通じており、ある種の治外法権さえ持っている。

つまり、ここで問題を起こす馬鹿は皆無と言っていい。

むしろ問題を起こすのは、真正の馬鹿だけである。

今日初めてネルイを訪れたローザとミカエルだが、以前いたミュレイ王国の貿易都市シズマでもギルド直営の宿に泊まっていた。

と言うか、それ以外の宿に泊まるのは、本人達はもちろん、他の宿泊客にとっても迷惑以外の何物でもない。

ギルド直営以外の宿に泊まると、必ずと言っていいほど、何かがある。

恨みをかっているどっかからの襲撃とか。

仕事の妨害工作だとか。

ミカエルの女性関係の揉め事だとか。

最後のは自業自得だとしても、2人とも微妙どころではなく、かなり恨みはかっている。

怨恨ではなくても、それぞれ事情があったりもする。

そう、いろいろあるのだ。

本当に、嫌になるほど。

そんな訳で、ギルド直営の宿があるなら、そこに泊まると決めていた。

場所も冒険者ギルドで聞いておいた。

宿の名前は『気まぐれな悪魔の館』。

はつきり言おう。

その名前を聞いただけで、何か予想がついた。

嫌な予感とか、そういうったものの前に、そもそも聞き覚えがある名前だ。

シズマでの宿の名前が『気まぐれな悪魔の館』。

同じ名前である。

そして、たどり着いた宿の外観も、記憶にあるものと同じだった。名前にちなんでか、所々蔦に覆われた壁。

屋根は黒とも群青ともつかぬ寒色。

窓ガラスは特注の曇りがかったもの。

多分、きつと、ちよつとしたキズさえも記憶にあるものと同じなのだろう。

「暇な奴だな」

「わざわざ転移させたんですね」

ミカエルもローザもどんよりした口調になってしまう。

いや、むしろ感心すべきなのか。

シズマからネルイに宿を転移するという、大がかりな魔術を使った事に。

そもそも空間魔術は高度な部類に入る。

代表的な空間移動テレポートは魔術の消費が大きく、せいぜい2・3人移動できれば大したものだ。

それを人間ではなく建物に応用するというのは、中々に大変だ。

対象が生物ではない分、生命維持に関する面では難しくない。

しかし、対象が大きい分、半端なく魔力を消費する。さらに、移動する場所に関して、恐ろしく精密さを要求される。

少なくとも建物の転移など、ローザはやりたくない。

やって出来ない事はないが、やりたいとは思わない。

そして、予想しながら開けたドアの中には、これまた予想通りの面々がそろっていた。

どっかで見た事のある店主に従業員。

どっかで見た事のあるパーティー。

「ミカエル、ここってネルイですよね？」

ローザの目は真剣だ。

都市どころか、国さえ移動したというのに、顔ぶれが変わらないというのはどうしたものなのか？

「諦める。」

奴は10人ぐらい分身がいるという噂だからな」

きっぱりと断言する。

神出鬼没で10人の分身を持つ　と噂されているのは、この宿の主人だ。

本気で違う大陸で同時刻に目撃情報があつたらしい。らしい、と言う噂なのだが、本人を知る全員が全員、そんな事もあると納得してしまう。

宿の主人　フェルディナンド・ヒノ。

どっからどう見ても20代半ばの外見で、自己申告50歳。穏やかな笑顔の好青年。

その実、お腹真っ黒。

多分、本来ならシズマどころか冒険者ギルド本部にいたくはないフェルディナンド。

彼はいつもの通りの笑顔で、ローザとミカエルを宿に迎えるのだった。

「いらっしやいませ。『気まぐれな悪魔の館』へ」

第4話 再会を祝して

テーブルには所狭しと料理が並べられている。

ホマール鳥の丸焼きにスリスのスープ。

ホマール鳥は全長5mの大物だが、性格が大人しく捕獲しやすい。味は淡泊なので、濃いめのソースをかけて食べるのが一般的だ。

スリスは淡水魚で、外見は非常にグロテスク。最初にこれを食べた人は、心底驚嘆に値する。これまたクセのない身で、どんな味付けでもあう。

他にもキノコと野菜のサラダや魚介類のフリッター、香草焼き、キノコのキッシュ、ホマール鳥のオムレット、フルーツ各種などが並んでいる。

なかなか豪華な食事だ。

まあ、これらの支払いを思えば、少々懐が痛い気もするが。

それでも、金額的には十分過ぎるほど余裕はあるのだし、問題は無い。

先ほど渡した竜^{ドラゴン}もそのうちにテーブルに並ぶ日が来るだろう。美味しい料理になって再会したいものだ。

さて、香りのよいお茶を飲みながら、ローザは横目で一人の青年を見る。

外見は若いエルフの青年だ。

もっともエルフなので、外見と実年齢があっているとは限らない。人間の平均寿命が60歳程度なのに対し、エルフの平均寿命は200歳程度なのだから。

確か記憶によれば、まだ30歳程度のはずのウォルフ。

エルフに性はなく、通常は名前だけだ。もしも名前以外を名乗っ

たなら、それは何らかの役目を表している事が多い。

そのウォルフは深刻とはいかないまでも、引きつった表情で胃を抑えている。

ローザにも気持ちはよく分かる。

と言うか、同じ心境だ。

視線を戻せば、ミカエルと2人の姿がある。

一人はドワーフで外見は身長の高い中年。

ドワーフも人間よりも寿命は長く、130歳程度生きる。

ただし外見が若々しいままのエルフとは違い、若くとも中年のよ
うな外見をしているのが通常だ。

彼の名はクライム・ジューノ。年齢は聞いたことがないので、ロ
ーザは知らない。

もう一人は、人間の青年である。

外見は20代前半ほどの年齢で、中身は子供のまま。

性格に難はあるものの、上位の精霊魔法の使い手である。属性は
風。

名はウィン。

多分、どう考えても偽名　　と言うよりも適当に名乗っている
だけだろう。

このクライムとウィンがウォルフの胃痛の原因だ。

そしてその2人が絡んでいる相手であるミカエルがローザの胃痛
の原因である。

もつとも絡んでいると言っても、そこに悪感情はなく、悪気もな
い。

ただ普通に話しかけたり、ちょっかいを出したりしてるだけであ
る。

だけではあるのだが、それが原因で爆発しないと切り切れないの
がミカエルが魔王たる所以でもある。

毎回の事とはいえ、気が気ではない。

ローザとウォルフの視線が合う。

お互いに苦笑。

苦労性だと、心配性だと言われようとも、どうしようもない事なのだ。

他の誰も心配しないので、この2人が心配するしかない。

ちなみに、少し離れたところで薬草茶を飲んでいるのがスペイル・クルツタス。

まだ年若いし顔色も悪いが、その薬師としての腕前はウォルフとローザが身を持って保証する。

リーダーであるエルフの剣士ウォルフ。

酒好きで陽気なドワーフのハンマーを獲物とするクライム。

愉快犯でトラブルメーカーの風の精霊使いウィン。

薬師にして魔術の使い手のスペイル。

この4人のパーティーはミカエルとローザの顔なじみである。

しかし、それはシズマでの事で、なぜここネルイにもいるのかは謎だ。

何となく ほぼ確実にこの店のマスターであるフェルディナンドが一枚噛んではいるのだろうか。

つまり、それは、碌でもない事をも意味しているのだろうか。

それでも、まあ、顔なじみは顔なじみである。

そして信用していい面々でもある。

だから、取り敢えずは、再会を喜びましょうか。

ローザがそういう気持ちで笑えば、ウォルフも苦笑を返してくる。

お互いに苦労しているからか、考えている事は分かりやすい。

視界の端にちょっと面白くなさそうなミカエルを捉えながら、ロ

ーザは笑う。

「再会を祝して」

「……乾杯」……

ローザと4人の杯が高く掲げられる。

それにミカエルが参加していない事まで、いつもの通りであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988x/>

天使の遊ぶ世界

2012年1月1日02時48分発行